論壇

戦争の時代　北朝鮮は動くのか

防衛弘済会　理事長　田原　義信（元陸将補）

1　ガザ

1973年10月6日、ユダヤ教の「贖罪の日」、第4次中東戦争がアラブ側の奇襲により始まりました。

50年後の本年10月7日朝、ガザ地区を実効支配するハマスは、数千発のロケット弾と特殊部隊をもってイスラエルを攻撃し、1千人以上のイスラエル市民および米国人11人を含む外国人を殺害・拉致しました。

完全な奇襲でした。

イスラエルは空爆などで反撃するとともに、予備役を動員してガザ地区に対する地上戦を準備しています（10月20日現在）。

2　大災害は常に奇襲から始まる

メディアは、ガザ地区の動きをすべて把握していたはずのイスラエルが奇襲を受けたことに対し、イスラエル政府および情報当局の失敗、驕り、怠慢並びに国内政治の混乱を指摘しています。

イスラエルの情報能力について、ここで評価するつもりはありません。重要な情報は目に見えないところで生まれ、育ち、消えていきます。部外者が評価することにあまり意味はありません。

大切なことは、今回の事態が、戦争は常に奇襲から始まるという歴史的教訓をわれわれに思い出させてくれたことです。

これは、戦争だけでなく、自然災害、経済危機などあらゆる大災害に当てはまります。私たちの生活でもそうです。雨が降りそうだから傘を持った。予想どおり雨が降ったが、何も問題がなかった。突然の大雨に見舞われた。予報は晴れだったため、服も荷物もずぶぬれになった。これが奇襲です。

情報や準備を超えたところ（想定外ということ）で奇襲が起こり、結果的に大災害となる。

大災害は、いつか必ず起こるものと考えるべきです。事前の情報や可能性の高さだけで、物事を考え、判断していると、いつかは奇襲されて大変な目にあいます。

普段から情報を収集し、警戒監視を怠らず、周密に準備していても、いったん想定外のことが起こり奇襲を受けたなら、その瞬間からは割り切って、落ち着いて、幅広く対処していき、状況が分かってきたなら持てる力を集中して選択・対処するのが危機管理です。

3　奇襲対処は幅広く、韓国、日本、米国の対応

韓国は、10月13日に輸送機派遣を決定、同日イスラエルのテルアビブ空港着、14日同空港発、同日韓国に到着しました。同機には、163人の韓国人に加え、日本人51人が同乗していました。

邦人等輸送に備え、空自機に乗り込む隊員（統幕TW）

韓国政府は、ユン・ソンニョル大統領の危機管理能力が高いことが証明されるとともに、日韓関係改善への姿勢が行動を通じて確認されました。

日本政府も14日、チャーター機で邦人の避難を図るとともに、チャーター機が不調に終わった場合に備え、自衛隊機をジブチに送り後詰の態勢を確立しました。

米国の反応は迅速、強力、幅広いものでした。

バイデン大統領によるイスラエル支持・支援の表明から始まり、イスラエル周辺に空母打撃群および海兵即応部隊並びに戦闘機などを派遣、ブリンケン国務長官、さらには大統領本人がイスラエルを訪問するなど次々と手を打ちました。驚くべきことに事態勃発1週間後の13日には早くも米国による武器・弾薬の支援がスタートしました。

4　ポイントは時代認識と米国の力の分散

ここで現在の国際情勢を整理してみたいと思います。

ヨーロッパでは、ロシアの侵略に対し、ウクライナが1年半以上にわたり防衛戦争を戦っています。ロシアもウクライナも疲弊しています。

中東では、ハマスの攻撃に対し、イスラエルが地上戦を開始する準備を行っています（10月20日現在）。さらに、シリア、レバノン、イランによる戦争の拡大が懸念されています。

アジアでは、軍拡を続けアジアの覇者を目指す中国、核・ミサイルの開発および配備を進める北朝鮮の脅威度が高まりつつあります。

世界では西に二つの戦争が起きていて、東に二つの脅威が高まりつつあります。ロシアのウクライナ侵攻以来、戦争の時代に入ったかのようです。

これらすべてに関係しているのが米国です。新たな中東危機が起こり、ウクライナで手いっぱいの米国の関与能力は大丈夫なのかと評論家や学者は疑問を投げかけています。

米国の国力の低下を嘆くより、米国の関与能力が分散されて離れている時代です。

さらに、欧州、中東、中国、朝鮮半島が危機を潜在的に含むということは冷戦時代以前の昔から変わっていません。

そういった目で国際情勢を見ることが必要であると思います。

5　朝鮮半島はどう動くのか？

このような情勢で朝鮮半島はどう動くのでしょうか？　最も懸念すべきは北朝鮮が動いて、ヨーロッパ、中東に次いで第三の戦線が生まれることです。

北朝鮮は、核・ミサイルの開発および配備に集中しています。9月6日には、新造の「戦術核攻撃潜水艦」の進水式を金正恩総書記の視察下で行いました。とうとう核ミサイル搭載可能な潜水艦まで北朝鮮は保有するに至りました。

北朝鮮としては、最先端の核、ミサイル、サイバーなどの科学技術が欲しい。そこに目をつけたのがロシアです。北朝鮮の旧式装備や備蓄弾薬は、ロシアがウクライナで消耗戦を戦うため、なく戦争へと拡大の危険があるだけに注意が必要です。

アジア太平洋地域の米軍が中東やヨーロッパに転用されれば、中国および北朝鮮にとってはプラスになります。

このような懸念を払拭するかのように、米国は10月12日に空母ロナルド・レーガンを韓国プサン港に入港させ、17日には戦略爆撃機B－52を通常の上空通過ではなく韓国中部の空軍基地に着陸させています。

また、去る7月18日には戦略原潜ケンタッキーをプサン港に入港させています。米国はその核戦力の三本柱すべてを半年間の間に韓国に派遣し米韓同盟の堅固さを誇示しました。

米国は、ガザ地区の動きをすべて把握していたはずのイスラエルが奇襲を受けたことに対し、イスラエル政府および情報当局の失敗、驕り、怠慢並びに国内政治の混乱を指摘しています。

イスラエルの情報能力について、ここで評価するつもりはありません。重要な情報は目に見えないところで生まれ、育ち、消えていきます。部外者が評価することにあまり意味はありません。

大切なことは、今回の事態が、戦争は常に奇襲から始まるという歴史的教訓をわれわれに思い出させてくれたことです。

これは、戦争だけでなく、自然災害、経済危機などあらゆる大災害に当てはまります。私たちの生活でもそうです。雨が降りそうだから傘を持った。予想どおり雨が降ったが、何も問題がなかった。突然の大雨に見舞われた。予報は晴れだったため、服も荷物もずぶぬれになった。これが奇襲です。

情報や準備を超えたところ（想定外ということ）で奇襲が起こり、結果的に大災害となる。

大災害は、いつか必ず起こるものと考えるべきです。事前の情報や可能性の高さだけで、物事を考え、判断していると、いつかは奇襲されて大変な目にあいます。

普段から情報を収集し、警戒監視を怠らず、周密に準備していても、いったん想定外のことが起こり奇襲を受けたなら、その瞬間からは割り切って、落ち着いて、幅広く対処していき、状況が分かってきたなら持てる力を集中して選択・対処するのが危機管理です。

3　奇襲対処は幅広く、韓国、日本、米国の対応

韓国は、10月13日に輸送機派遣を決定、同日イスラエルのテルアビブ空港着、14日同空港発、同日韓国に到着しました。同機には、163人の韓国人に加え、日本人51人が同乗していました。

韓国政府は、ユン・ソンニョル大統領の危機管理能力が高いことが証明されるとともに、日韓関係改善への姿勢が行動を通じて確認されました。

日本政府も14日、チャーター機で邦人の避難を図るとともに、チャーター機が不調に終わった場合に備え、自衛隊機をジブチに送り後詰の態勢を確立しました。

米国の反応は迅速、強力、幅広いものでした。

バイデン大統領によるイスラエル支持・支援の表明から始まり、イスラエル周辺に空母打撃群および海兵即応部隊並びに戦闘機などを派遣、ブリンケン国務長官、さらには大統領本人がイスラエルを訪問するなど次々と手を打ちました。驚くべきことに事態勃発1週間後の13日には早くも米国による武器・弾薬の支援がスタートしました。

4　ポイントは時代認識と米国の力の分散

ここで現在の国際情勢を整理してみたいと思います。

ヨーロッパでは、ロシアの侵略に対し、ウクライナが1年半以上にわたり防衛戦争を戦っています。ロシアもウクライナも疲弊しています。

中東では、ハマスの攻撃に対し、イスラエルが地上戦を開始する準備を行っています（10月20日現在）。さらに、シリア、レバノン、イランによる戦争の拡大が懸念されています。

アジアでは、軍拡を続けアジアの覇者を目指す中国、核・ミサイルの開発および配備を進める北朝鮮の脅威度が高まりつつあります。

世界では西に二つの戦争が起きていて、東に二つの脅威が高まりつつあります。ロシアのウクライナ侵攻以来、戦争の時代に入ったかのようです。

これらすべてに関係しているのが米国です。新たな中東危機が起こり、ウクライナで手いっぱいの米国の関与能力は大丈夫なのかと評論家や学者は疑問を投げかけています。

米国の国力の低下を嘆くより、米国の関与能力が分散されて離れている時代です。

さらに、欧州、中東、中国、朝鮮半島が危機を潜在的に含むということは冷戦時代以前の昔から変わっていません。

そういった目で国際情勢を見ることが必要であると思います。

5　朝鮮半島はどう動くのか？

このような情勢で朝鮮半島はどう動くのでしょうか？　最も懸念すべきは北朝鮮が動いて、ヨーロッパ、中東に次いで第三の戦線が生まれることです。

北朝鮮は、核・ミサイルの開発および配備に集中しています。9月6日には、新造の「戦術核攻撃潜水艦」の進水式を金正恩総書記の視察下で行いました。とうとう核ミサイル搭載可能な潜水艦まで北朝鮮は保有するに至りました。

北朝鮮としては、最先端の核、ミサイル、サイバーなどの科学技術が欲しい。そこに目をつけたのがロシアです。北朝鮮の旧式装備や備蓄弾薬は、ロシアがウクライナで消耗戦を戦うため、なく戦争へと拡大の危険があるだけに注意が必要です。

アジア太平洋地域の米軍が中東やヨーロッパに転用されれば、中国および北朝鮮にとってはプラスになります。

このような懸念を払拭するかのように、米国は10月12日に空母ロナルド・レーガンを韓国プサン港に入港させ、17日には戦略爆撃機B－52を通常の上空通過ではなく韓国中部の空軍基地に着陸させています。

また、去る7月18日には戦略原潜ケンタッキーをプサン港に入港させています。米国はその核戦力の三本柱すべてを半年間の間に韓国に派遣し米韓同盟の堅固さを誇示しました。

一方で、メディアが米国の関与能力の低下を報ずれば報ずるほど、プーチン大統領も習近平主席も金正恩総書記も喜ぶことでしょう。

しかし、本当にそうでしょうか？　今や米国一国のみが超大国の時代ではありません。欧米、日本、韓国、オーストラリア、最近ではインドも含めて世界の安全保障の確保に向けて協力している時代です。

さらに、欧州、中東、中国、朝鮮半島が危機を潜在的に含むということは冷戦時代以前の昔から変わっていません。

そういった目で国際情勢を見ることが必要であると思います。

9月6日には、新造の「戦術核攻撃潜水艦」の進水式を金正恩総書記の視察下で行いました。